



# 守ることは、守られること

## 環境に関わる意識の転換

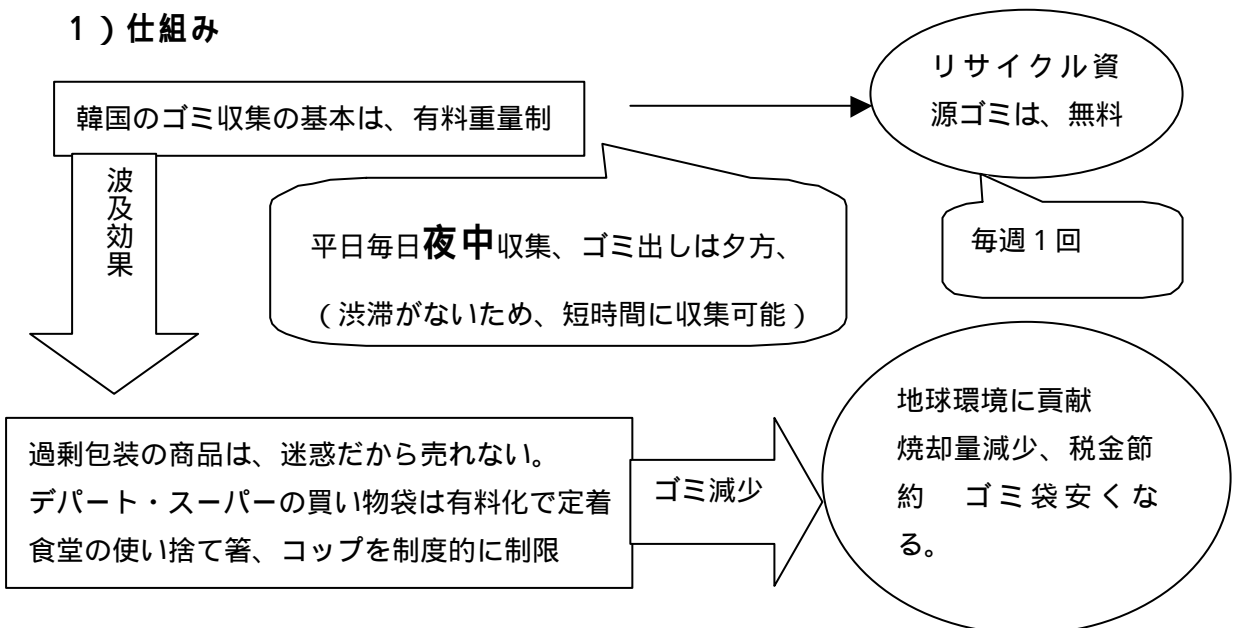
自宅の冷蔵庫に、古い牛乳と新しい牛乳がある。どちらから使うのか。スーパーに買い物に行った時、古い牛乳と新しい牛乳がある。どちらを買うのか。ヨーロッパの70%の人は、自宅の冷蔵庫と同じくスーパーでも古い牛乳を買うが、日本では1%の人だけだ。日本で一日に捨てられる食品の量は、約2000万人分、世界で一日に餓死する子どもの数は約5万人、ゴミ焼却炉は日本が世界で一番多い。世界でもっとも環境政策が進んだ国デンマークの穀物自給率は127%、エネルギー自給率は140%、日本の穀物自給率は27%、エネルギー自給率は4%だ。人間が作り出すゴミから環境が破壊され、食料危機を招く。人間が生きるための基盤が揺れている。(以上のデータは、NPO「地球村」資料より) 参考表) GDP伸び率と一次エネルギー消費量の伸び率(1973年～1996年)

国名	GDP伸び率	一次エネルギー消費量の伸び率
日本	106.5%	57.4%
アメリカ	67.1%	23.0%
イギリス	51.4%	6.3%
ドイツ	60.7%	3.5%

出所：『エネルギー・経済統計要覧1999』をもとに算出

## 韓国のゴミ処理の事例

### 1) 仕組み



## 2) ゴミ有料化がもたらしたこと

韓国でゴミ収集を有料化した当時は、多くの市民が反対したが、様々な問題乗り越えながら定着した。しかし、有料制は発想の転換をさせた。リサイクルできない物は、全てお金を払って捨てることを認識しはじめた。物作りには、過剰包装が消え、リサイクルできる素材が競争力を得た。飲食店でも使い捨て用品を自粛し、経費節減に励んだ。また、韓国は乾燥した気候のため、スープ類の料理が多い。水分は焼却する時、有害物質を大量に発生させるため、大きな課題だった。有料化になってからは、充分に絞ってゴミを出すように努力するようになった。

韓国の市民は、ゴミを減らす努力は、実際に自分たちの税金が節約されることを実感した。ゴミ袋が自治体によって違うのは、努力した市民への報いの形で現われる。地球環境に貢献できる共通認識が、毎日の生活の実践から身につく、多くの市民団体が立ち上がるようになった。

## 3) 川崎市でも参考にできること(市民団体が取り組んだ事例)

ゴミ捨て地区や飲食店に、蓋つきの衛生的な大きな容器を設置して、毎日食べ残した飲食物を無料収集して、肥料化している。生活が裕福になったことや核家族化により、家庭内では余った食料品が多い。最近の新たな取り組みとして、すぐ必要な人に余った食料品を寄付するフードバンクがある。米、缶詰など、賞味期限内で食べられない量の食品を分ける仕組みだ。資源を捨てないで、有効利用し、ゴミも減らすことはもちろん、共に生きる社会の実現に大きな意味がある。

### 地球環境に優しいまちづくり、行動は地元の一步から。

ゴミ処理問題の原点は、ゴミを減らすシステムへの転換が必要だ。しかし、頭では理解していても実際に、毎日の生活の中で実践することは、難しいのが現状だ。それを実現可能な形として制度化するのは大事だと思う。ヨーロッパでは、4Rが定着しつつある。「やめる(Refuse)、減らす(Reduce)、再利用(Reuse)、再資源化(Recycle)のゴミ消滅を実践すべきであろう。環境問題は、一人一人が行動で示すことが前提だ。また、一人だけががんばるからできることでもなく、地球規模の人が毎日しなければ実現できないことでもある。人間が生きる基盤を守ってこそ、我々も守られるだろう。

